



# メルロ＝ポンティ・サークル第18回大会プログラム

日時: 2012年9月29日(土) 9:00 -18:00

場所: 東京電機大学(東京千住キャンパス1号館1204室)

9:00-9:45

司会: 北村晋(早稲田大学)

佐藤愛(筑波大学、パリ第一大学)

無意識における明るさの問題—E. ミンコフスキーとメルロ＝ポンティ

9:45-10:30

司会: 北村晋(早稲田大学)

玉地雅浩(藍野大学)

半側空間無視の人はパースペクティブを失うことは出来るのか—メルロ＝ポンティの眼差しから考える—

10:30-10:40

休憩

10:40-11:25

司会: 廣瀬浩司(筑波大学)

柿沼美穂(東京藝術大学)

認知バイアスと身体図式

11:25-12:10

司会: 廣瀬浩司(筑波大学)

澤田哲生(日本学術振興会・東京大学)

メルロ＝ポンティと反遠近法の現象学

12:10-13:15

昼食 (13:15-13:45 ミーティング)

13:45-14:40

司会: 河野哲也(立教大学)・質疑通訳: 稲原美苗(UTCPT特任研究員・立教大学)

Michael Gillan Peckitt (Hull University, UK Philosophy Dept.)

My Body is a Prison: Investigating Disability in Philosophy with Maurice Maurice Merleau-Ponty and Emmanuel Levinas

14:40-18:00

シンポジウム

## レヴィナスとメルロ＝ポンティ—実現しなかった対話を考える—

司会: 村上靖彦(大阪大学)・松葉祥一(神戸市看護大学)

小手川正二郎(日本学術振興会・明治大学)

レヴィナスの「知覚の現象学」

レヴィナスの著書『全体性と無限』におけるメルロ＝ポンティへの明示的な言及は、両者の中心主題である言語活動に係わるものだ。曰く、メルロ＝ポンティは身体的な発話から独立した思惟など存在しないことを誰よりも明確に示した一方で、語り手から聞き手への方向性が言語活動の根幹にあることを看過しているために発話の本質を捉え切れていない(第三部「対話が意味を創設する」の節)。このメルロ＝ポンティ批判は、レヴィナスの他者論ではなく身体論および知覚論にその根拠を有する。レヴィナスは、『全体性と無限』第二部の「労働、身体、意識」の節で、自己身体と物理的身体の二重性をどちらか一方に還元せずに身体の本質として分析し、そこから世界との係わり(表象)と言語活動を捉え直そうとしているからだ。本論はこのような視点から、レヴィナスの「知覚の現象学」をメルロ＝ポンティの『知覚の現象学』への根本的な問題提起ないし応答として提示することを試みる。

國領佳樹(首都大学東京)

言語の現象学—メルロ＝ポンティはレヴィナスにどのように応答しうるのか

『知覚の現象学』のよく知られた一節で、言語コミュニケーションはいかにして可能か、という問題が提起されている。メルロ＝ポンティによると、伝統的な言語的意味の理解では、言語コミュニケーションの不可能性が帰結してしまう。つまり人々の言語的なやりとりは、実質的には各々の独り言に他ならないことになる。この類いの誤謬説を回避するために、メルロ＝ポンティは、言語的意味についての新たな考え方を提示する。

さて、『全体性と無限』においてレヴィナスがメルロ＝ポンティに言及するとき、おそらくその念頭にあるのは上記の問題に対するメルロ＝ポンティの取り組みである。レヴィナスは同じ問題を共有しつつも、メルロ＝ポンティの不十分さを指摘しているように思われる。

したがって、まず明らかにしなければならないのは、この問題に対して両者を隔てる決定的な差異がどこにあるのか、また、その源泉はどこにあるのかである。

私の考えでは、当該の問題に対する両者の立場の違いをもたらすのは、知覚経験に関する考え方の違いである。つまり、どちらも知覚をモデルにして言語的意味の理解を試みているにもかかわらず、まさにそのモデルにこそ決定的な差異が横たわっているのである。

この点をはっきりさせたうえで、本論ではレヴィナスの批判に対してメルロ＝ポンティの立場からどのような応答が可能なのかを探ることにしたい。

佐藤義之(京都大学)

### 「肉」に「外」はあるか

肉は知覚世界のすべてがそれに属するという意味で、「外」をもたない。この「外」の排除を、レヴィナスの議論を発想の手がかりにして検討してみたい。

肉であることは、見るものとして、あるいは見えるものとして、知覚の働きを担うことを離れて考えられないものであるが、知覚はときに失敗するし、可逆性は十分成り立たないことがある。そのとき肉の外、肉の他が姿を見せるように思われる。むしろ、肉の存在論は、それもまた見えうるもの(le visible)のひとつとみなし、肉の秩序のなかに位置づけようと反論するだろう。しかしながらそのようにみなすことは必然ではない。むしろ、知覚される世界を生き、それを征服しようとする主体にとってのみ必然なのである。そういう主体にとり、たとえば知覚の失敗により今見えていないものも、支配下に収めうるし収めるべきものなのである。こういう志向がすべてを見えうるものとして、つまり見られるべきものとして位置づける。肉の存在論は、このような志向を背景にしており、そのため肉の外、肉の他を積極的に評価する道が閉ざされている。

村瀬鋼(成城大学)

### 身体を考える二つの仕方

レヴィナスは他者論の人であるのに劣らず身体論の人である。そんなレヴィナスを身体論の代表選手とも見えるメルロ＝ポンティと比較してみる。メルロ＝ポンティは心身合一を考えることで主体と世界との連続性と混交を言おうとする。レヴィナスも心身合一を考えていると言えるが、これは主体の世界および他者からの分離と接触を示すためである。ここにさしあたり身体を考える二つの仕方を区別することができる。前者は内と外とを交錯させ、後者は内と外とを切断する。互いに乗り入れ合いもするこの二つはしかしたんに平等なものではなく、レヴィナスのそれに或る優位があるように思われる。それは固有身体の問題において、他者との乗り越えがたい二元性におかれた「私」の身分を理解させ、同時に心身の概念上の二元性の由来をも理解させてくれる。そこで、こと身体論に関するこの比較において、固有身体の意味を蒸発させてしまう傾きを持つメルロ＝ポンティよりも、「私」たる身体における二元的なものの分離と結合に焦点を合わせるレヴィナスにこそ軍配を上げたい。提題では、両者共通の参照項と見なされうるデカルトにも訊ねつつこの見立ての成否を吟味してみたい。

## 全体討議

18:00～

懇親会

### ■会場アクセス

東京電機大学 東京千住キャンパス 1号館1204室



### 【最寄駅】北千住

JR常磐線、東京メトロ(日比谷線、千代田線)、東武伊勢崎線、つくばエクスプレス

※北千住駅 東口から徒歩1分

※京成本線の関屋駅からは徒歩7分

※東武伊勢崎線の牛田駅からは徒歩7分

### ■宿泊について

北千住は、JRや東京メトロで東京駅から約25分、また上野駅から約10～12分の場所にある、アクセスの良い場所です。宿泊施設が北千住で見つからない場合は、東京駅、上野駅付近からお探してください。